

心の栄養剤 No.17 声を出してお読み下さい。間違はなく心が元気になりますよ！

モンロビア行ききの列車

戦後間もなく、日本人の女性がニューヨークに留学しました。戦後間もなくなので人種差別、栄養失調、いじめにありました。そのうち、体に異常が出ました。診療所に行ったところ「重症の肺結核」と言われた。

その頃の肺結核は死の病でした。どうしたら良いかと医者に聞いたところ「素晴らしい設備のあるモンロビア（ロスマンジェルス近）のサントウムに行きなさい」と言われた。その時ニューヨークからロスマンジェルスは特急列車で5日間かかっています。「死ぬよりはマシ」と思い恥ずかしい思いをして友人達からカンパを貰い汽車賃を集めたが、食料は3日しかありませんでした。しかし「田畑を売っても治療費を送るので早く入院しなさい」という親からの便りを胸に列車に飛び乗った。

3日目に食料は尽きた。なげなしのお金でジューズを車掌にたのみました。ジューズを持ってきた車掌が言った「あんた重病だね」彼女は「私はこういう状態でモンロビアに行く途中です・・・行けば助かるかも知れない」車掌は「ジューズを飲んで元気を出しなさい。きつと助かるよ」

4日目の朝、車掌がジューズとサンドイッチを持ってきました。「これはほくからプレゼントだよ、まあ、元気を出しなさい」4日目の夕方、車内放送が突然流れた。

「皆さん、この列車の中に日本人の女子留学生が乗っています。彼女は重病です。ワシントンの鉄道省に電報をし、会議の結果モンロビアに臨時停車させなさいと指令が来ました。朝一番にこの列車が停車するのは終着駅のロスマンジェルスではありません。彼女を降ろすためにモンロビアに臨時停車させます」車掌が来て「安心しなさい」

手早く荷物をまとめて乗車口近くのロンパーメントに運んでくれました。

夜明け前にモンロビアに着くとそこには、車椅子を持った看護婦さんが数人待機していた。そこに乗せられたとき、そっと乗ったつもりだったのだが列車が何かざわめいているので彼女が振り返りびくりました。一等・二等の窓という窓が全てあいていてそこには、アメリカ人の乗客達が半身を乗の出して紙切れに住所や電話番号を書いたものにドル紙幣を挟んで紙吹雪のようにならして投げてよこしてきた。そして「死んではいけない！きつと助かるから大丈夫、安心しなさい！」とか「もし人の声が聞きたくなったら私の電話番号に電話してきなさい！手紙を書いてきなさい！さみしくなったらいつでもいいよ！」と声をかけてもらった。感動で涙があふれてきました。「3年ほど入院しているんですよ」その間も毎週毎週見知らぬアメリカ人が見舞いに来てくれた。これも列車の乗客たちだった。

3年間の膨大な治療費・入院費を払って退院しようとした時、それもお金持ちの一人の乗客が全て匿名で払ったあとだったということです。

※この列車の乗客の誰が偉いとか言ひ話ではなく、それぞれがそれぞれの役割の中で出来る事を一生懸命やったと言ひ話です。それぞれがこの世に生を受けた意義がある。

隣と比べるのではなく自分自身の生き方、昨日の自分・今日の自分として

明日の自分と比べる、自分の範囲でいろいろ

一生懸命心豊かに生きるよというところが大事

と教えてくれた実話です。

